シシ垣を可能にした沖縄村落共同体の特質

－国頭村奥の大垣（ウーガチ）を中心に－

宮城能彦
（沖縄大学人文学部）

1. はじめに

国頭村奥の大垣（ウーガチ）は、1903（明治36）年に糸満盛邦によって提案され構築された。18世紀頃に構築されたといわれる同じ沖縄本島北部の大宜味村や西表島などの猪垣に比べると100年以上も後のことである。また、同じ国頭村内でも安田集落では1881年には猪垣が確認されており（註1)、県内では比較的新しい猪垣だと言える。

沖縄（琉球）における18世紀は、村落が古琉球的村落から近世村落へ再編された頃であり、奥の大垣は明治政府による沖縄の旧慣存続期を終え、土地整理事業によって近代的村落へと変貌していく時期である。大垣を提案した糸満盛邦は3年後に「共同店」という村人全員が共同出資して設立運営する「売店」も提案して設立させていることは興味深い。「大垣」と「共同店」が何故この時代に登場したのか。そこには共通する何らかの「思想」があるように思える。

今回は、奥の大垣の構築と維持管理方法を沖縄の村落共同体の変遷と特質の中で位置付け、猪垣を支えた村落共同体の特質について考察する基礎としたい。

2. 奥集落の大垣（ウーガチ）

(1) 奥の大垣（ウーガチ）

・東大垣：集落の前浜（メーバマ）東側の通称アンヌサーを起点とする。

・西大垣：前浜（メーバマ）の西側のユッピ崎を起点とする。

・東大垣と西大垣は集落南の奥川中流の大田川（ウフダーガー）で結合（註2)

(2) 大垣（ウーガチ）構築と糸満盛邦

・糸満盛邦の登場

(3) 大垣の管理方法

・「垣当たりの制」（垣監視役）と「総廻りの制」（定期的視察）

・罰則

(3) 大垣の放棄（1959年頃）

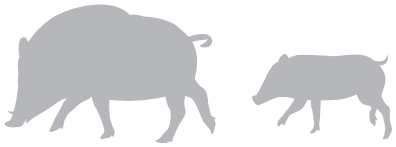
3. 沖縄村落共同体の変遷と特質

(1) グスク時代から近世までの（村落）共同体

・グスク時代の地域共同体　→　遺跡群というまとまり。

「同一御嶽（守護神 - 祖霊神を祀る）の氏子と、その村落」？（註3)

・古琉球時代の沖縄村落



→地域共同体を形成する遺跡群（小集団集落）

・近世の沖縄村落

→遺跡群（小集落群）から近世村落へ　・単一集落・集落周辺に耕地を集中

※　大宜味：1776 ～ 1883 年、田港から根路銘まで、長さ 2361 歩（約 4.7 H）、高さ 4 ～ 7 尺（1.2 ～ 2.1 m）の猪垣（石垣）の改修（球陽）（註 4）　八重山：新村建設の際猪垣 2260 丈（約 6.8 H）を築いた（崎枝村屋良部「長栄姓家譜」（註 4）

・奥野彦六郎『南島村内法—民の法の構成要因・目標・積層』に見る村落共同体

(2) 近代の沖縄村落共同体

・旧慣存続と土地整理事業

・間切と村・区制の改正

(3) 近代沖縄村落共同体と奥集落

・大垣根（ウーガチ）の発想から「共同店」の発明へ

・「村内法」と大垣の管理

(4) 田村浩『琉球共産村落の研究』と奥集落

・時代的背景と奥集落

(5) 大正 7 年編纂「奥ノ事績」に見る奥「共同体」

・「奥ノ事績」から読み取れること

4. 奥集落および沖縄村落共同体の未来

(1) 平恒次「琉球村落の研究—国頭村奥区調査報告」に見る大垣（ウーガチ）放棄直前の奥集落

(2) 戦後、奥集落の変遷と現在

・人口・世帯数・産業の変化・過疎化・超高齢化と共同店

(3) 奥の大垣（ウーガチ）に象徴される奥の伝統と可能性

・大垣の時代的意義と現代的意義

・奥の「伝統」とは何か、「可能性」はどこにあるのか

[註記]

1.　古井貴士（2013）「沖縄本島北部における猪垣の実態に関する研究調査—国頭村安田区を事例として - 」『第 6 回 シシ垣サミット in やんばる・奥記録集』

2.　宮城邦昌（2013）「奥の共同猪垣（ウーガチ）について - 先人が培った生産遺跡から知恵を感得し、村おこしに活かす—」『第 6 回　シシ垣サミット in やんばる・奥記録集』および齋藤和彦（2013）「奥の猪垣と、山、開墾の利用—地図、空中写真に見る「農」と「林野」の関係、『第 6 回　シシ垣サミット in やんばる・奥記録集』

3.　仲松弥秀（1977）層の村・沖縄民俗文化論、沖縄タイムス社

4.　沖縄大百科事典（1983）沖縄タイムス社